
「魂論（こんろん）、ドッペルゲンガー」

iuと猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「魂論^{こんろん}、ドッペルゲンガー」

【Nコード】

N4804M

【作者名】

i uと猫

【あらすじ】

かけだし小説家のゆうちゃんは、道で幼馴染の友人のドッペルゲンガーに出会う、それには背後にエピソードがあつて、ゆうちゃんは作家として感じ方を示すのである…

その1

オレは自宅に戻る為、いつものように路筋の途中で近所の団地を迂回した。左側の視界に、団地の敷地内の隅っこに在るネコの額ほどの、小さな砂遊び場を眺め行くのだ。

出版社からの帰宅途中だった。彼らを目撃したのは偶然だった。

連載小説の原稿に派手に校正を入れられ、展開がぐちゃぐちゃになってしまった束と、増えてきたファンレターの何通かを無造作に入れた紙袋。それとは別に、スーパーで買ったネコの缶詰とバラ売りの完熟オレンジをこったに詰めた紙袋を小脇に抱えて、そこを通りすぎようとしてふと目をやった先に、彼らはいた。

その砂遊び場にいた小さな少年は、かつての幼馴染みの正ちゃんだったのだ。

判別は——もちろん当時の印象的な姿も手伝ったが、理由も無く忽ち分かる直感の類、のものだった。

他人の空似でなく間違いなく、少年は幼馴染の正ちゃんだった。まだ10才に達していない頃の、だろうか。そこに座り込んでいた正ちゃんも、オレをゆうちゃんだと認めた風にこちらをじっと見つめていた。

だが、なぜ彼は幼い姿のままなのだろう。オレと同一年だから、もう30過ぎのオッサンの筈だがと奇怪に思ったが、寒気などは感じなかった。

ただし双方に、無言の戦慄に近い空気感があつた気がする。

それに耐えられなくなったのか、幼い正ちゃんは不意に砂場から立ち上がり、奥の水飲み場の後ろに、走り去るようにして回り隠れてしまう。注意から逸れて（それで）いたが気付くと連れ添う少女がいて、その子も付き従い追うように隠れたのだったが。

だとしたら少女も。これも幼馴染の美樹ちゃんじゃないのか。容姿もそんなだったと、今度は印象を当てはめて、これは後追いして気付く感覚で。

オレはいぶかしく思い、光景を注視したまま団地を囲う網柵を回り、砂遊び場に立ち入ってみたのである。

砂の城を作っていたようだったが、見ると砂地は起伏なく空ろ（うつろ）に平坦だった。そこからだと水飲み場に背後の死角はなく、先にある駐輪場の情景が見渡せた。景色は、見通す空間に何もなく誰もいないかを強調するように、先には手前から数台目の自転車、後輪をカラカラと回転させていただけだった。

このように、幼い姿のままの正ちゃんと、いつも3人組だった同じように少女の美樹ちゃんは突然現れ、忽然と姿を消してしまったのである。

オレはその夜になって、書斎で想いに任せてウィキペディアを検索した。

ドッペルゲンガー、離魂、自己像幻視。

自分の姿を第三者が違つところで見る、または自分で違つ自分を見

る現象。自ら自分のドッペルゲンガーと出会う体験をした場合には、「その者の寿命が尽きる寸前の証」という民間伝承…

オレはぼんやりと、自分の姿を見た訳じゃないと考えて。では他人、正ちゃんに会った場合はどうなるのだろう。

それにしても危ない解説が並ぶもんだと、しばらくディスプレイを眺めていたら、机の傍らに愛猫のミエネコが佇んでいるのに気付く。晩御飯はまだでしょうか、という催促ではないのだ。この娘はオレが物思いに耽る（ふける）と、必ず足元に鎮座する賢い猫なのだ。ミエネコが見せる落ち着いた気配のおかげで、ふいに時間を取り戻したのだった。

オレは机から離れ、間続きの洋間を横切って、庭に面する窓ガラスから、既に夕暮を過ぎた暗闇の下の庭の木々に目をやる。サツシの窓枠に結露がありそれは幾筋にもなって、涙のように硝子を伝い流れていた。

まだ早い時間とはいえ夜分に、正ちゃんに連絡を入れてみる気になったのは、幼馴染に何かあったのかもしれないという嫌な胸騒ぎがあったからだ。

正ちゃん、美樹ちゃんとは中学まで同窓だった。仲良し3人組といえども、それぞれに個性が芽生える思春期を過ぎた頃には付き合ひもなくなり、時々すれ違ったびに、お互い淡い憧憬に微笑んでいた程度に薄縁となっていた。だが友人として身を案じる事も出来ないほど心が遠く離れた訳じゃないと、オレの内では整理されていた。

約20年振りか、に連絡を入れてみたオレを、正ちゃんは随分驚いた風だったが「よう、ゆーちゃん、元気にしてるのか？」と弾ける彼の声はほころんでいて、オレの耳に懐かしく心地良く届いた。

ドッペルゲンガーが心配だったというのは、案外旧交を温めるただの口実だったのかもしれないと、オレは安堵よりも遙に胸を熱くする懐旧の想いを感じたのだった。

「や、久しぶり。裕だよ、おれは元気だよ、正ちゃんがどうしてるかと思つてさ」

お互いに近況を語らい合う、気が付くと存外に盛り上がる会話になった。そんなものだろう、懐かしいクラスメートの名前や、エピソードがお互いの口から次々に繰り出されるのだから。

但し、では時間を作り再会しようかという話にまでには至らない筈だったのだが、不意に語られた正ちゃんの一言が空気を変える事になった。

「実は昨日、ゆーちゃんに良く似た子供を見かけたぞ、それでお前を思い出していたんだ。不思議だな。タイムリーにゆーちゃんから連絡があるなんて」

オレは眉を寄せていた。慌ててこちらにも実は…と、昼間の状況を語ってみると受話器の奥の正ちゃんも不穩に思つたようだ。

「オレの場合は自転車に乗った子供のゆーちゃんとすれ違ったぞ。そう言われると並んで走っていたのはどこかで見た女の子だった…美樹だったかもしれんな」

週末だった。

かくしてオレ達は、明日の夕刻に会わないか、ちよつとどこかで一杯やろう、という話になったのである。もちろんオレは、久しぶり

に逢う古い友人の笑顔が楽しみなばかりだった、ともすればドツペルゲンガーの件など忘れてしまっただけに、であった。

オレは、紫煙をくゆらせて賑やかな週末の居酒屋の空気を楽しんでみた。

久しぶりに楽しい感じで酒を飲む。周りにはサラリーマンのグループや、若い連中のサークルの塊だろうか、ワイワイとやっている。

オレも会社勤めの頃は、よく連れ立って飲んでたつけど、談笑に沸く店内の空気に会社勤めをしていた頃の回想を誘われ、懐かしむ内にこれまた懐かしい、向かいの座る正ちゃんの姿を眺める。あぐらをかいてジョッキを煽る（あおる）彼は随分大人になったが、やはりオレの目には、どう見ても少年時代の正ちゃんの大人版だった。

正ちゃんも30代前半、意気盛んな大人だ。中堅電機メーカーに勤めそれなりのポストを与えられて、毎日大変だとおしぼりで太い首周りの汗をぬぐい、愛妻に、中学生と小学生の2人の娘に囲まれてこれも大変だと、ビールの泡を飛ばしながら彼は語った。

で、ゆーちゃんには驚いたな、小説家なんて大変だな？と正ちゃんに切り出されて、今度はオレの近況報告だ「まあ、オレはオレなりかなあ」

20作位シリーズものを描いたかなあ、1万部位売れてるよ？へえ、そりゃスゴイ、よくわからんのだがスゴイ事だな、で、結婚は？そりゃ、縁あつての事だし、なあにこれからサ、オレも正ちゃんを見習って頑張りたいよ…

若く細身の店員の娘が、器用に幾つかのビールの中ジョッキと、複数の料理皿をかかえ、背後をすり抜け際に「ドウゾ」とジョッキを置いていく。そんな風でまだジョッキ一つしか空けていない早い時間に、店内に正ちゃんの名を尋ねる店員の、連絡を告げる声が響いていた。

「伊藤正一様、お電話です、いらっしゃいますか？」

はい俺だ、と正ちゃんが立ち上がる。美樹だろうと呟いてから、彼は店内の電話口に向かい立っていった。

遠藤美樹、今回の幻の3人組の一人だ。正ちゃんは彼女にも連絡を取っていて、今日はこの居酒屋でささやかな再会の宴を楽しむ段取りだった。彼女は遅れて来るのであるうか、会話の中で正ちゃんからは「ご主人とやってくると快諾した」と聞いていたが。

苦笑いをしながら「まだ30分ですが、撤収でえす」と言いながら正ちゃんは戻ってきて「やっぱり美樹だった。場所を変えてくれと言ってきたぞ。あいつ昔のまんま我儘だよ」わがまま

場所を変えて呑み直す事になったのだった。

向かう先は、この地域でも有名な高級料亭だったので一瞬耳を疑ったが、オレも苦笑いとなった。これも正ちゃんに教えられて初めて知った事だが、美樹ちゃんは金持ちの家に嫁いだらしく今や豪奢セレブ女性で、だからをそんな場所をセッティングしたに違いない、オレ達には場違いなのだ。

オレは口惜しくて、小皿に残る根野菜の煮つ転がしを口に放り込ん

だ。しばしの時、居酒屋の料理の匂いに煙る店内を眺めていた、名残惜しかった。

その2

その料亭は、居酒屋がある賑やかな地区から、少し外れた閑静な場所にあった。

タクシーで走る事、暫し。そこに降り立ってみると成る程、この辺りは静かな料亭小路の空気だと分かった。

灯の入った石灯籠に透く布地の屋号があり、木塀に囲まれた広い敷地のまず表格子を潜る。

玄関前は打ち水がされ、盛り塩が置かれ、蹲がしつらえてあり、明るい玄関に足を踏み入れると香の香りがする、そこは格式ある料亭らしかった。

（カウンターや、厨房が見当たらない処なんて初めてだな）

などと、キヨロキヨロどぎまぎしたのはオレだけではない。正ちゃんも「はあ」と感嘆して、数寄屋造りの梁や長押しを見物していた。

もちろん仲居の対応は丁寧だった。彼女に従い、竹林の中に清流の音がする中庭を巡るように長い廊下を行くと、案内された座敷は最も奥だった処にあるこじんまりとした和室で、そこではふすまを開けて庭を伺い、接待する仲居とお喋りをしている女性がいた。

それが、既にそこにいてオレ達を待ちわびていた、遠藤美樹だった。

彼女は、小紋だろうかと和服姿に、髪を夜会巻きに結う装いで、静かな女性同士のお喋りを―庭の風情を語らっていた様子だったが、オ

レ達を見て慌てたようになる。傍の仲居に「では、主人から連絡があればお願いしますわ」と云い「揃いましたので、お願い致します」とも告げる。

仰々しい挨拶をすまし立って行く仲居と入れ替わる風に「どうぞ、お久し振りで」と俺達は、硬い表情の遠藤美樹に座敷に招き入れられたのだった。

「すみません、都合で主人は遅れてまいります。上座は…ええと、どうしましょう」

何だか落ち着かない和服の婦人と、中年男性2人がそこにすくみ立つ、うろたえる始まりとなった。

ところが、オレ達はひと呼吸のうちにもう無造作に、テーブルを囲み勝手に座り込んでいた。何もかも高級そうな料亭の廊下を歩く内に、奇妙な気後れをオレ達は申し合わせたように息苦しく感じていたし、そもそも我々は軽く一杯やって来たのだ。

だからといって無礼無粋のつもりもなく。こだわらない感じで「美樹?」「美紀ちゃん?」とオレ達は笑ったのである。

遠藤美樹は目を丸めたが、不意にふうつと息をついて。すんと、と俺たちの向かいに座り込んでしまう。

緊張が、すつと解れたようだった。彼女は、大人の美しい婦人となった表情に、少女のようなあどけなさを浮かべて「はーっ、緊張した」

オレ達は顔を見合わせるし、彼女は赤面になるし、であった。

「お久しぶり。正ちゃん、ゆーちゃん、2人共本当に逢いたかった。美樹です」

静かにだが、3人は思わずハグしあうほどの歓声を上げて、仲良し3人組のかつての時間を取り戻したのである。

料理は秋の懷石料理だった。銀杏や松茸の炭火焼き物、和え物、鯉のお造り、むかごの吉野葛寄、エトセトラ。オレはビールで、正ちゃんは冷酒を美味そうに呑んでいた。遠藤美樹もいける口らしく、杯は箸と程よく進む風だった。

「ふうん、2人共立派になっちゃって」とは、少し顔を赤らめての、遠藤美樹がオレ達を評しての弁だった。

3人が歩んだそれぞれの人生の経緯については、華を咲かせる思うかがい出話の其処かしこで語られおよそ窺うかがい知れて、それぞれで感じる処だった。

オレにしてみれば、勉強が苦手だった正ちゃんが、今や一流企業に勤め、これからのポストを任されてというのは立派だ。それにもまして遠藤美樹の現在いまは、夢物語のヒロインのように輝いて見えた。彼女は、この辺りでも裕福と名が知れた名家に嫁いでいた。ご主人は西日本屈指の呉服店の経営者の令息だ。次男坊だという。

彼女は「次男だから大したものでも無いの」と、羨ましがる我々に恥ずかしがり「だからこの宴会は私に持たせてくれて構わないのよ」とも言ってしまう、返って羨望のブーイングを蒙かぶってしまったりし

た。

オレ達の羨望をよそに、遠藤美樹は男達をしきりに褒めてばかりいた。お世辞ではなく、目を細めてオレ達に見とれて喜んでいた。

オレはというと、時々彼女を盗み見て、彼女の左手の薬指の結婚指輪を見つめ、和服の装いにしつらえの良さを感じ、高価そうな髪留めやイヤリング等を眺め、頬を緩めて（幸せそうだな）と感じていた。正ちゃんも同じ思いだったろう。

このように3人は概ね^{おおむ}幸せであつたといつて良い。ただし、語らに^お変調がなかつた訳でなく、その下りを描いておこう。

それにしても、何度目にもなる感嘆で「正ちゃんも立派だけど、ゆーちゃんもスゴイ。作家だなんて」と、遠藤美樹がオレに焦点をあて「だけど、まだ独身が玉に^{きず}瑕ね」

うーんと、苦笑いのオレを、彼女は更にかかった。

「昔からモテてたじゃない？ちゃんと彼女はいるんでしょ？作家さんなら尚更に、周りが放つておかないと思うわ」

答えにくいと言うか、セレブに臆してしまうというか。オレが正ちゃんを伺うと「俺も、同感だ。早く所帯を持つべきだと思う」と彼は返し、彼女と似た笑い方をするのだ。

「ネコと暮らしているしな。オレは今家庭を持つとか、あんまり考えてないかもな」

オレは、素の意見を述べたつもりだったが、他の2人が急に固まってしまうのに気付いて「え？」

しまった、猫イコール彼女論は問題だったか。オレは少し複雑な思考の末「…でも」と、弁解のような抗議にも似た口ごもり、となった。

オレの猫好きは昔からだ。殊に我が家のミエネコは、まるで女房気取りでオレの横にいる、だから心が満ち足りている——こんな愛猫家の論理が、世間に通用しない事はもちろん知っていて、それを迂闊に洩らしてしまったのは、オレの失言でしたと頭を掻く。これが弁解だ。

抗議とは、美樹と正ちゃんがそこに疑念するのは変だろうという、まるで、少年少女の気分を取り戻していたオレが調子に乗った言い分だった。まるで昨日まで。夕方遅くまで教室に残って、お喋りをしていたじゃないかと言いたいオレは「でも、オレ達って動物は好きだったじゃないか。正ちゃん、美樹ちゃんにだけは言われたくないよ」

ええ？と正ちゃんは苦笑いだ。

「オレ達はペットの葬式もやってた仲じゃないか？ほら、学校の裏山にさ」

オレが幼い日のように口を尖らせると「ああ、そうか」と、ようやく懐かしむのは正ちゃん、美紀ちゃん共にだった。

「小鳥や、学校飼育のウサギ…純粹だったね、私達」

遠藤美樹は呟き、寂しげに笑い「でも、昔の話だわ。忘れちゃった」
オレも、もちろん頷く。頷くのだが少し寂しく思い、軽く裏切られた気分を、遠藤美樹に僅かに胸が痛む思いで感じていた。理由があり、在りし日の少年時代が思い出される。

オレ達が通っていた頃の当時の小学校は、20年程前にはまだ土地の再開発などなく、学校の周辺にはいくつも畑や小山があった。度々ではないがオレ達は、自分達のペットが亡くなった時は共に泣き、小学校の裏山に丁寧に弔う埋葬をした。両親達が行ってくれた事もあったし、自分達の手だけでやった事もある。

ひととき記憶に残るのは、遠藤美樹が飼っていた小さな子猫を埋葬した時の記憶だった。彼女はずっと大泣きだった。オレと正ちゃんが穴を掘り、土を被せてやった。線香を立て分らないながら手を合わせ、ぐずぐずしていたものだから、気配があった雨が落ちてきてしまい、3人はズブ濡れになって走り帰った、オレは（美樹ちゃんの涙が雨になった）と、思いながら。

正ちゃんも、その事に想いを馳せていたのだろうか。懐かしむような、でも寂しい話は止めようと困り顔で、それを見て取ったのか慌てて男達に酒を勧め、話題を変える遠藤美樹、となる。

「ところで、なぜ急に連絡をくれたの。突然で、私は驚いたのよ？」
うん、それがなあと、正ちゃんはお酌に恐縮しながら。

「ドッペルゲンガーだったんだよね…そんなだよな？ ゆーちゃん」

やっぱり説明はオレか、だ。もちろんオレは怖がらせないような口ぶりで、を意識した。

「ドッペルゲンガーはさておいて。この再会を祝して、世にも不思議な現象はあった。時を同じくして、オレと正ちゃんは、それぞれ近所で少年時代のお互いに、出会ったんだ。もちろん、そっくりさなんだと思う。でも、それが連絡を取り合うきっかけを作ってくれたんだよ。美樹ちゃんの事も懐かしくなって、人妻なのに連絡したんだよね、正ちゃん？」

正ちゃん「うん、そうそう、ごめんな、忙しいのに」で、オレは大笑いになる、遅れて釣られ、遠藤美樹も笑ってみたようだが怪訝色。

「ドッペルゲンガーって、聞いた事があるわ、出会う筈がない人に会える…幽霊でしょ？」

「いや、そんなのじゃないよ」

オレは慌てて否定する、やはりこんな事で怖がらせたくないのだ。

「自己像幻視っていうんだ。つまり、自分とそっくりな自分と出会う場合がドッペルゲンガー。今回は、オレ達はお互いを見た訳だから他人を見た事になる。だから一応ドッペルゲンガーじゃないし、奇怪な事でもない。他人の空似だね、良くある話じゃないのかな？」

「俺達って神様が仕向ける程、よっぽど逢いたかったんだよ、な？美樹」

正ちゃんが、ふざけて笑わせようと冗談の合の手を入れるので、聞く彼女も可笑しそうに笑った。

「そうなんだあ、不思議な事があるのね…」

少し考え込む彼女だ。オレ達が、いや、今の話は怖がらなくてもいいんだぞ、と軽く慌てると首を横に振って「いいえ」と彼女。

「てつきり。あまり良くない…何か相談事かなと思って」

彼女は躊躇^{ためら}いがちだった。遠回しにボツボツと語るには。彼女の恵まれた境遇を知る友人も居るだろう、これまでも幾度か、突然旧友から連絡があり。逢ってみると融資をしてくれたの助けてくれたの、決まって面白い話ではなかったのだ、という。

「正ちゃんと、ゆうちゃんだけはそんな事ないって思っていたの。だから正直、ホッとしたわ」

ふえ、そうなのか？とオレたちは苦虫を噛み潰しの顔で「金持ちって大変だな」「それって大学時代の友達だろ？美樹は、市立の女子大だったよな」

しばらく、苦笑いのまま彼女は押し黙っていた。初めて宴に間伸びした空気が漂い、男達がその空白に気付いたのは、おずおずと「あの…」と遠藤美樹が切り出したからだった。

「だけど2人になら。私に出来る事があれば、助けてもよくってよ？」

「？」

「他の人は嫌だわ、でも私の一番の思い出は貴方達2人だわ。貴方

達になら私、いくらでも援助してあげたいわ」

彼女の言葉に、オレ達は顔を見合わせていた。

「本当に出来るのよ、私、お小遣いなら充分あるし、主人に相談もできるし」

待て待て、正ちゃんは苦言になるが表情は優しい。オレも困った、の苦笑いを作った。

「それは逆援だぞ、逆・援助交際。巷では流行らしいが、それは風俗みたいな、その…変な話だぞ」

「芸術家に当てはめるのなら、それってパトロンだぞ。売れないが才能のある青年の特権だ、オレ達若者じゃないぞ」

オレ達がとやかく言い始めたから、それに抗う遠藤美樹で「でも、困っているなら言ってくれてもいいのよ？」

正ちゃんは敢えてワハハと笑って、もう話の腰を折るぞ、だった。

「美樹？俺は大丈夫だよ、女房もいるし。そんな援助、アイツに知れたら何と言われるか…恐ろしい」

でもゆーちゃんは独身だし、いつそ此处は美樹と変なお付き合いをしてみてはどうだい、ゆーちゃん？などど正ちゃんのキツイ冗談だ。振られてオレも慌てる。

「オレだって大丈夫だよ。オレだって、猫に知れたら…大変だ？」

オレの珍妙なセリフにそれで場は、軽く沸く笑いとなった。

我に返った遠藤美樹は顔を赤らめて、私何を馬鹿な話をしたのだろつと恥じ入っていた。此処まで思い入れてくれる優しさに、もとより男達が感激しない筈はない。座敷は和やかな空気を取り戻し、最後まで気持ちの良い宴となったのだ。

結局、遠藤美樹のご主人は姿を見せなかった。仕事の都合がつかないと、仲居が連絡を告げにやってきて、それが良い時間だったので、それで散会のきっかけとなった。

オレ達が料亭を後にしたのは、まだ早い夜で、22時頃だった。正ちゃんとは、いくつかハシゴ酒になった。彼は馴染みのスナックをどうしても紹介してくれると退かないので仕方なくだ。それでも、オレの帰宅は午前様にはならなかった。

この夜の酔いによる眠りは、なぜか浅かった。中途半端に酔いが醒めた不快感でトイレに立つ。

オレは、目が冴える気分を憶えて書斎に向かった。原稿の入稿日や人に逢う都合など抑えてから、ベットに戻ればすぐに眠れるだろう…

書斎をうろつろし、ふと窓に目をやると。その時、戸外に人の気配を感じたのである。

カーテンを薄く開けて、月下の庭を見ると。そこにはあの団地で見かけた姿のままの、正ちゃんが再びいて、オレを見つめていたのだった。

驚くなり、戦慄なりになろうものの、オレはこの時も不思議さばかりを感じていた。脳裏に浮かんだのは、数時間前に、家路に向かうタクシーの車内での正ちゃんだった。半ば寝ているかと、程よく酔った彼は独り言を言った「逆縁の話は我ながらまずいと思っただろうな？美樹の顔色が変わってたな」そして、苦く「美樹も結局。金持ちの常識外れの奥様に墮ちていくのかな」と呟き、寂しそうに目を閉じていた。それを聞きながら苦く笑うばかりのオレだったが。美紀ちゃんの顔色が変わったのは、むしろドッペルゲンガーの話聞いた時でははかったか、とオレは感じたのだ、と、なぜか思い出す。

（正ちゃん？なぜまた現れたんだ？）

瞬きの間にだったのだろうか、次の時には、庭木の横に立つ幼いまばた正ちゃんは消え失せていた。気付くとオレの足元にミエネコもやってきていて、その怪訝さを認めたのか、彼女はニヤンと小さく鳴いた。

伊藤正一、遠藤美樹。

彼らとの再会は終わったのに、まだ終わっていない何かがあるのか？どちらかの身にオレの知らない何かがあるのだとしたら、それは一体何であろうか。

その3、最終話

電話が鳴っていた。それで我に返ってみると、夜が白み始めていた。

眠れずに、考え込んでいたオレだった。頭の中では、繰り返しパズルのピースを組み立てていた。

正ちゃんという幼馴染みのドッペルゲンガー、記憶の糸、関連の痕跡…

考えてみると、同窓会にもろくに顔を出さない、人づきあいを疎^{うと}んじてきた自分に気付いていた。オレは友人達の情報をあまりに知らなすぎると、苦く思いながら電話に出てみると、始めに返答がない。

無言電話かと思われたその通話の主は、思う一方の1人^{ひとり}、遠藤美樹であった。噂をすればのタイミングを感じる。オレは何気ない口調に反して、構える内心だった。

「昨晚はご馳走様。どうしたの、美樹ちゃん？」

「…」

「こんなに夜遅く？というか、もう朝なのにな？」

「…ゆーちゃん、あのね」少し間が空く。意を決してというのが、それで分かった。

「私、大変な事をしたの。私、主人を殺したの…」

「！」

オレは、受話器を握って固まってしまふ（殺したって？ご主人を？）

「美樹ちゃん、どうしたんだ」

オレは少し声を荒げていたかもしれない。それで、彼女はすすり泣きはじめてのかもしれない、始めから泣いていたのかもしれない。

オレの思索は、彼女の泣き声でまた動き始めていた。頭の片隅のどこかで、パズルのピースの起点になる形を見つけていた。「発端」というピース…

オレは出来るだけ冷静な態度で、対応していた。

「話してもらえるかい、美樹ちゃん、何があったの？」

遠藤美樹が、ご主人を殺害したというのは、今しがたの話ではなかった。ひと月半前の事だという。つまり昨夜ご主人が、仕事の都合で顔合わせ出来なかったというのは、彼女の作り話であって――料亭の仲居などは、頃合にそう告げてくださいと心づけと共に言い添えておけば、簡単に応えてくれるであろうし。

それは一応の病死だった。彼女の夫は難病を患い、長い闘病生活を続けていたらしい。その果てに遂に帰らぬ人となったが、その最期に、妻である遠藤美樹が安楽死をさせたのだという。

「人工呼吸器のスイッチを切ったのは私なの。お医者様はいらしたけれど、その時お手洗いに立たれた。そこから帰ってきて検分して

「静かに逝われました、ご愁傷様です」とおっしゃって、呼吸器の異状は不問になさった…」

オレは沈痛に、受話器を握り締めていた。オレが繰り返す「そうか、そうだったか」は、うわ言だった。

ALS（筋萎縮性側索硬化症）だったらしい。10万人に数人しか発症しない稀な病気だ。発症すると数年で全身の神経が麻痺し、意識を残したまま全ての感覚が失い、闇に閉ざされてしまうという難病中の難病。治療方法はないのか？現状の医学では、発症原因もわからず、治療方法も無い。有名な物理学者も発症し、その凄惨性はメディアで報じられた程だ。安楽死は、認められないのか？本人のインフォームドコンセント意思表示の有無により状況は微妙だ。遠藤美樹のご主人について、それは無かったと彼女は言っている…

オレと正ちゃんは、オレの運転する車中でそんな話をして、遠藤美樹のマンションを訪ねていた。たすそこは地域の1等地、彼女が暮らすフロアは高層階の中ほどだった。

朝の8時前だ。正ちゃんはオレの連絡に慌てて駆けつけてくれた、出勤支度の身なりだった。ワイシャツにネクタイを締め、薄いブルーの作業着を兼ねた上着だろうか、胸ポケットは手帳や筆記具で膨らんでいた。オレは、よれよれのTシャツにジーンズの軽装で、これでも立派な仕事着なのだが。

広いリビングだった、20畳はあろうか。テーブルやソファ、調度品、インテリアはそれぞれ高級品で洗練されていたが、どこか無機的に冷たく、それが主を失った部屋あるじの空気なのだろうか。サイド

ボードの花瓶に白い薔薇が大きく生けられていたが、その艶やかな白味が返って痛ましくそこに映えているのだった。

遠藤美樹はオレ達に直面してソファアに座って、始め、涙ながらに淡々と亡き夫の話を、独り喋っていた。

大学時代に知り合ったのだという。彼の方で一目ぼれしてくれた。楽しかった。共に愉しんだ文化サークルは痛快だった。熱心だったラグビー部副主将時代の夫は、誰よりも堂々として、雄姿はまぶしかった（そう語る彼女の瞳が、いかに美しかった事か）新婚時代もそれからもずっと、私達は仲良く幸せだった、それなのに。

3年前に突然、病魔がやってきた。闘病の間彼はずっと強かった、希望に満ちていた、そして遂には潔いさぎよかった…死の間際にも優しく、彼は瞳で彼女に挨拶をして逝った…

最期は目を閉じて石のようになってしまったと、そこでは口をぐんだ彼女もまた、石のように沈んだ表情をしていた。

オレと正ちゃん、2人に来てくれと言ったのは遠藤美樹である。普段着の彼女は、白いポロシャツにデニム地の素っ気ないスカート。長い髪を無造作に後手に束ね、白い肌は化粧をせずとも20代で通用する程の大変な美人だったが、双眸は泣き果てて腫れた瞼に、真っ赤な瞳だった。

しばらく続いた重い空気の中で、正ちゃんが「本当に、警察に？」

遠藤美樹が、コクリと頷く。オレはうーんと唸って「どうだろう、今になって申し出ても」と重ねて。

「敢えて、波風を立てる必要はないんじゃないか？、難しい話だけど…このままスルーでも、いいとも思う」

いいえと、首を横に振る彼女のうつむいた顔から涙が落ちる。顔を上げるその仕草に、彼女の固い決心が見てとれた。

「私は、正ちゃんとゆうちゃんに感謝しているの…私、本当は死ぬつもりだった」

死ぬつもり？に、オレ達はギョツとするのだが、彼女はまた首を横に振るのである。

「財産がある事は知っているでしょう？名家で、親戚も多くて、さぞや複雑な話になりそう。だけど現実はその事はないの。周囲はみなさん親切で、義母様も義父様も「息子の忘れ形見だ」と変わらず可愛がって下さって」

「だから単純にわかったの。これほどの幸せを残してくれた彼が、私の全てだったって。だから私に残された道は、生きるか死ぬかの2つだけだった」

オレ達が黙り込んでいると「ドッペルゲンガー？不思議ね、感謝しなくちゃ…」

いつしか泣きながら笑っている、不思議な表情をした遠藤美樹であつた。

「正ちゃんから連絡があつて、懐かしかったわ。死ぬ前にひと目と思つと、バカみたいに嬉しかった。だから、喪中なのにそれを隠して…だった」

彼女は笑みを強調して「正解でした。私、生きる気になったのよ」

「だから、正直にしたいの、生きるのならに罪を償いながら生きた
い」

「終わったと思うべきじゃないか」と、正ちゃんが家庭を持つ主人あるじの語調で、強めて差し挟むのだが、やはり遠藤美樹は「いいえ」で

「ありがとう、正ちゃん、ゆーちゃん。ごめんさない、でも私は主人にこだわって生きたい。意地でも生きて、おばあちゃんになって彼の隣に逝く。主人に「貴方の面影だけでちゃんと生きて、幸せだった」と報告したいの」

結局、男達はどこから、歯を食いしばって泣いていた。さあ、警察に連れて行って頂戴、と言う彼女も泣いていたのだが、あっさりと笑ってもいて。まるで悪い事をして警察に出頭するのは、肩を落としたオレ達であるかのようにだった。

さて、オレ達は。市街の外れのサッカー場に到着していた。

先刻、所轄の警察署を後にしていた。遠藤美樹を送り届け、面倒な手続きと事情聴取の始まりに立ち会った後、の事だ。

警察署での遠藤美樹に対する取り扱いは、刑事事件としてであった。自首であるとはいえ彼女が直ぐに帰宅できる筈もない、彼女は一応被疑者として取調べを受けるのである。

但し、もちろん事の概要が穏やかであるので、担当刑事と婦人警官は「悪いようにはならないでしょう。ただご親族以外の、事件に係のない方はお引き取り願います」

オレ達は忽ちの内に、即席の取調べ室から追い出される処となった。そこを離れる間際、遠藤美樹が、机から立ち、深々（ふかぶか）と頭を下げていた。そこで改めて胸を痛めるオレ達も、頭を下げる。それを見ていた担当刑事が、うんうんと頷いて（私に任せておけ）風だった。それが僅かな慰めのように感じられて、それで早々と情状酌量にならないかと、有りもしない期待にオレ達は暫く、閉じられた部屋のドアの前から動けずにいたのであった…

オレ達がサッカー場に來たのには理由があった。

警察に向かう車中で、後部座席に座っていた正ちゃんと遠藤美樹の2人はどちらかともなく思い出話を始めて「ゆーちゃん、警察の前に、サッカー場に寄らないか？」と、正ちゃんが告げるに至ったのだ。

彼が言うサッカー場は、市街外れの運動公園区域の一角にあつて、そこはかつてオレ達の通った小学校が在った場所だ。その言葉に遠藤美樹が喜色を浮かべているのが空気で分かったが、オレは敢えて返事をしなかった。

「ゆーちゃん？」

オレは、運転に気を取られえるフリをしていて、気が付いたように返答した。

「正ちゃん、美樹ちゃん。オレは行きたくないよ」

「今行くとオレ、気持ちがブレるかもしれない。オレだって美樹ちゃんの決心を支えたいんだ。ここは真っ直ぐ、警察に向かおう」と、このセリフも芝居だった。

遠藤美樹が何か言おうとした、その上にオレは重ねていた。

「オレと正ちゃん任せろよ。あとで、オレ達でちゃんと行ってみる」

2人は軽く残念がったが、やはり車内は沈鬱な空気で、行こう行くまいの話にならなかった。

―と、そんな経緯^{いきわづ}だった。

なぜ、オレが往路^{いきみち}に2人の要望を断ったのか？その時オレには遠藤美樹を、そこに連れて行けない考えがあった、確かめたい事があったのだ。

サッカー場に着いてみると、正ちゃんは、此处に3人で立ち寄りなかつた事にさしてこたわっていなかった。彼は駐車場で、車から降りると大きく背伸びをして、青空に大きく息をついた。

「はー、大変な1日だった。ゆうちゃん、後で会社に送ってくれよ。仕事は…昼からだなあ」そして、周辺を見渡して「此处も随分変わったな、面影も無くなった」

オレも車を離れる。駐車場の片側の、植樹エリアの中心を成す檜の巨木を指差し「檜の木だけは、残ってるよ、憶えてるだろう」と言い、サッカー場に向かい歩み始めていた。

巨木は、オレ達の幼い時から地域で天然記念樹として指定保護されるほどの、美しい大木だった。土地の再開発時にもそれは残されてそれにより方角を間違えなければ、どこに校舎があつてどこが裏山だったか見当がつく。

このサッカー場は、今は半ば市民に開放されているにも関わらず、贅沢な施設だった。スタンドは1万人以上収容でき、アウェイ席の区画まで準備できる。ピッチは天然芝で、照明や、関連施設も充分に設備されていたが、政治的な問題で拠点にする有力なサッカーチームを失って、管理が二転三転し、今は県が公共施設として運営している…

正ちゃんは、設備の建物を眺めていた。オレは入口受付を訪ね「役所から着ました、芝の確認だけやって帰ります」とだけ告げ、ぼんやりとしている警備員に正ちゃんを示し差し「業者です」

「ああ、業者さんね」位の、気の抜けたものである。オレがグラウンドへの入退場口に向かつてズンズン歩んでいくと「あれ？おいおい、どこに行く」で追いかけて来る正ちゃんだった。

彼にすれば、駐車場に車を止めその風景を眺めひと時を過ごせれば良い―そこが昔、校舎のあった場所であるし、自分の欲求にも遠藤美樹との約束にも応えた事になる、そんなつもりでいたからだ。

ところが、オレが目指すのは、かつての裏山辺りだ。今はグラウンドピッチの真ん中、かつてオレ達がペットの埋葬をやった場所だった。

説明を求める正ちゃんに、オレは答えながら歩む。オレの説明は自分の意見だけべらべら喋る、まるで独り言だった。

「美樹ちゃんは本当に死ぬつもりだったと思う、だからオレ達のドッペルゲンガーは警鐘を鳴らす為に現れた」

「なぜ、オレ達だったのか？幼馴染だったから？…多分、ペットの埋葬だ」

「雨が降ったあの時の子猫は、実は彼女が殺したんだと思う」

そこで正ちゃんは、微かに頷く反応を見せた。彼も状況を考えて同じ風に感じていたのだろうか、オレは構わず話し続けていた。

「理由は可愛さ余ってだったか、病気だったからか？ともかく安楽死に近い方法だったろう。奇しくも、今回とまったく同じケースだった。だから強くイメージされて、オレ達のドッペルゲンガーは遠藤美樹によって形成されたのか、呼び出されたか？…だった」

「ドッペルゲンガーは、自分自身に出会うと命に関わるらしい、だから死に関係の無いオレ達は、お互いが友人を見るにとどまった。今回の事は2つの在り様を考^{よう}えなくちゃいけない。まずオレ達のドッペルゲンガーは確かにいた。『警告』の為に」

「で、オレ達がいたのなら。美樹ちゃんのドッペルゲンガーもいた筈だ。彼女は自殺も考えていたから…こちらは定説の通り『死』の為に。じゃあ肝心の、遠藤美樹のドッペルゲンガーはなぜ姿を現さないのか？どこにいったのか？」

だから彼女を此処に連れてこれなかった、とオレが呟くタイミングで、オレ達は施設の暗闇から光に満ちたグラウンドに出る。正ちゃんは改めて分からないと態度を露にし、オレの説明は自問に変わ

り。オレ達は共に歩調を緩め、ゆっくりとグラウンドの中央に進んでいた。

「彼女のドッペルゲンガーは、彼女自身―現在の美樹ちゃんの前にも現れていない筈だ。なぜなら彼女は、生きると決めたからだ。彼女が自分のドッペルゲンガーに出会ってしまっていたら、もっと悲観的になっていただろう。なぜ現れないのか、いや、もしかしたら動けないでいるのか？」

オレ達は、広い芝のピッチのほぼ中央まで歩んできて、そこに立ち止まる。オレは「正ちゃん」と声を掛けてから。

「現れないのか、動けないのか理由は分からない。ただ多分、美樹ちゃんのドッペルゲンガーがいるとしたら此処こゝだよ。オレ達はこの辺りに子猫を埋葬した…」

すると。果たしてそこに…少女の立姿が、揺らめき現れていた。

幼いまるであの日の姿で、遠藤美樹は1人だった。正ちゃんが驚いてオレを見て「ゆーちゃん、此処にいるって、何で分かった？」

「作家の感性をなめるなよ」

もちろんオレも半信半疑ではあつて、決めセリフを吐いたつもりだったが…オレの呟きに過ぎない。実は、全容が分かった気がしない、自身にすら説得力がなかったのだが。

オレ達は、少女に声を掛けようとし、お互いに申し合わせたようにそれを止め、お互いに制し合っていた。

少女の遠藤美樹は、オレ達に気付いていたがそれ以前に、何かに抗^{あらが}っていた。よく見ると、か細い彼女の手首を、何者かが握っている。握っているのはこれも子供の手だ、手首から先しか分らないが、オレには特徴で直ぐに分かった。右を握る色黒の手、男の子の手、正ちゃんだ。左側の手は輪郭がはっきりしないが。驚いている正ちゃんの表情から、彼にはそれがはっきり見えるオレの手らしかった。

つまりこういう事だったのだ。…オレ達のドッペルゲンガーは、『警告』の為だけに現れたのではなかった。遠藤美樹のそれを拘束して、彼女を引き止めて、彼女自身の元へ彼女を行かせないように、『死』に近づけないように守っていたのだ。オレと正ちゃんの2人は、相互に必要としていた。オレが正ちゃんの前に姿を現した時は、正ちゃんが。その逆の時はオレが。彼女の手を離さず、ここで頑張っていた…

少女の遠藤美樹の姿は、次第に虚^{うつ}ろになっていった。それはそうだろう。彼女は今、警察にいる、生きようとしている。彼女のドッペルゲンガーは、存在出来なくなっているのだ、とオレは達観に似た了解を憶える。

ただ悲しかった。この少女はこの為だけに現れ、また失われていくのだろうか。

と、その時、彼女の両手が自由になる。オレはギョツとする、なぜオレ達は（拘束の）手を離れたのだろう、まさかと吹きだす汗を感じたのと、彼女が自由になって両手で何かを受け止めたのと、彼女が微笑んで消えてしまったのを理解したのは、同時の中にある一瞬だった。

オレと、正ちゃんは顔を見合わせていて。次に、お互いの瞳から

止めようもなく涙がこぼれるのを、お互いに笑い合っていた。

彼女は、最期に自由となった。彼女が受け止めた物、それはラグビーボールだった。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4804m/>

「魂論（こんろん）、ドッペルゲンガー」

2011年11月10日20時13分発行